



# 博物館だより

横須賀市自然・人文博物館  
神奈川県横須賀市深田台95  
046-824-3688



<https://www.museum.yokosuka.kanagawa.jp>

もくじ

巻頭特集：トピックス展示「湊町・ヴェルニー公園の歴史と遺産」	1
幕末のコレラ流行	2
三浦半島と周辺海域の活断層	2
最近みつけためずらしい昆虫たち	3
臨時休園中の動物たち 天神島臨海自然教育園	4
雪景色 天神島臨海自然教育園	4
初春に見られた植物 馬堀自然教育園	4

巻頭特集

トピックス  
展示

## 「湊町・ヴェルニー公園の歴史と遺産」

横須賀製鉄所建設時からの湊町・ヴェルニー公園の土地利用の変遷について、赤れんが基礎などの発掘資料を中心に紹介しています。

3月から新たに展示した市内在住の市村様ご寄贈の「戦艦陸奥の精密模型」も一見の価値ある魅力的な展示品です。この機会にぜひご覧ください。

【展示エリア別みどころ紹介】

● ヴェルニー公園の土地利用の変遷

公園内には、かつて繁華街や軍事施設などが存在しました。公園内から出土した、旧海軍の巨大な赤れんが倉庫の基礎や土管などの出土遺物を交えてこれらを紹介しています。

● 軍港逸見門（海軍番兵塔・軍港正門門柱）の修復

台風の被害を受けて取り外された建設当初の屋根材を一部再現展示しています。

● 発掘されたトロッコとレール

出土品の実物と戦前期の使用当時の様子を紹介したパネルを展示。

● 近代遺産臨時展示コーナー

旧横須賀海軍工廠の重量計などを展示。感染症拡大に伴う緊急事態宣言を受けた休館中に展示品の入れ替えを行いました（展示更新の内容は次の段落参照）。



戦艦陸奥の精密模型

【臨時休館中に展示品を入れ替え!!】

臨時休館中に、これまで展示していた横須賀造船所の附属学校出身の新倉定吉さんがイギリスで購入した机を、ヴェルニー記念館に移設しました。さらに、これに併せてヴェルニー記念館の展示品も一部入れ替えました。

トピックス展の会場では市村様ご寄贈の「戦艦陸奥の精密模型」や、「陸奥の主砲の引き揚げ時の記録写真」、横須賀海洋・IT教育の会様ご寄贈の「陸奥新聞」などを新たに展示しています。

「戦艦陸奥の精密模型」は、ヴェルニー記念館に展示中の大型精密模型にも劣らない見ごたえのある模型です。

と き：令和3年8月31日（火）まで（休館日を除く）  
9時～17時

と ころ：横須賀市自然・人文博物館3階第1学習室  
(近代建築史担当 菊地)

編集後記

今号でご紹介した「湊町・ヴェルニー公園の歴史と遺産」は、(仮称)横須賀市近代遺産ガイダンスセンターの開館にあわせ、また緊急事態宣言にともなう臨時休館によって開催期間が縮小されたことも考慮して、開催期間を延長しました。ぜひご覧ください。(柴田)



## 幕末のコレラ流行

近年、「新型コロナウイルス」の流行によって、世界的大流行（パンデミック）が引き起こされました。今回は、こうした現在の出来事と関連して、江戸時代の日本が経験した伝染病「コレラ」の大流行をめぐる歴史について紹介したいと思います。

「コレラ」とは、コレラ菌の感染により発症する伝染病で、突然の腹痛と嘔吐、そして激しい下痢の症状を引き起こします。

日本においては、江戸時代に三度のコレラの流行がありました。いずれも流行時期や死者数には諸説ありますが、まず日本最初の大流行となったのは、文政5年(1822)8月から10月下旬にかけてといわれています。主に西日本、とりわけ大坂で大きな被害を出しました。二度目の流行は、安政5年(1858)夏頃のこと、長崎で流行が始まり、7月には江戸でも感染者が出ました。死者は江戸だけで、3～4万人といわれています。コレラ流行下の江戸の様子を記した『安政箇箇流行記』(1858年9月刊)によれば、火葬場(「荼毘所」・「焼場」)からあふれた棺桶が数限りなく積み上げられて「臭気」が充満し、道には火葬場へ向かう棺桶で行列を成していたそうです。こうした病死者のうちには、『山海見立相撲相模浦賀』を描いた歌川広重(1797-1858)や書家の市河米庵(1779-1858)が含まれるなど、当時の著名人が多数亡くなりました。そして、三度目の流行は、文久2年(1862)夏頃で、そこに麻疹(はしか)の流行も加わり、江戸だけで実に23万人以上(7万人とも)の人々が亡くなったとする説もあります。

では、現在の横須賀市域において「コレラ」は流行したのでしょうか。手がかりとして、大田和村(現横須賀市太田和)の百姓(浅葉)仁三郎の記した日記(横須賀史学研究会編『浜浅葉日記(三)』(横須賀市立図書館))から、安政・文久期の「コレラ」流行に関する記事を紹介します。まず安政5年(1858)8月には、村内で「しめ(縄)」を引く準備をしたり、念仏講をひらくことで疫病除けをしています。しかし、仁三郎の身边にそれほど逼迫した様子は感じられません。ところが、それから四年後の文久2年(1862)7月から8月の記事には、浦賀・大津・長坂・松輪・金田などの近隣村々で「ころり」が流行し、複数の死者が出ているとの伝聞が記されるなど、不安な日々を過ごしていたようです。そうしたところ、ついに仁三郎の身边にも病魔が忍び寄ります。8月13日には、妻の実家である三ヶ浦(現葉山町)の知人でしょうか、七左衛門(「麻疹之後大病之よし」)、おたせが病死しました。そして翌14日には、七左衛門の妻・おくに、高次郎なる人物も相次いで病死。さらに八日後の8月22日には三ヶ浦の義兄がコレラ(「ころり病」)で病死しています。こうした事態に仁三郎は、「流行のころり、おそろしき事二候」(8月14日条)と記しています。仁三郎の日記だけでは、三浦半島全体の被害状況や伝染病の大流行が地域社会に与えた具体的な変化を把握することはできません。しかしながら、文久期におけるコレラ(および麻疹)の流行が三浦半島にも悲惨な被害を与え

ていたことがうかがえます。

なお、文久期(1861-1863)といえば、坂下門外の変・皇女和宮の降嫁・將軍徳川家茂の上洛・生麦事件とその賠償をめぐるイギリスとの戦争危機(薩摩藩では薩英戦争)など、攘夷(外国人の排斥思想)をめぐる事件が頻発した時期でもありました。洋学者である福沢諭吉(1835-1901)は「(※攘夷論者を恐れて)およそ文久年間から明治五、六年まで十三、四年の間というものは、夜分外出したことがない。」(福沢諭吉『新訂福翁自伝』)と回顧しています。こうした世相ですから、「米艦ミシシッピー号が中国から日本にコレラ病を持ち込んだ」と、伝染病の流行は日本を外国に「開放」したせいだと外国人を敵視する人々もいました(ボンベ『日本滞に見聞記』)。歴史的にみても、伝染病流行後の社会においては排他的な傾向が強くなるのかもしれませんが。

(文献史学担当：藤井)



安政5年(1858)、江戸におけるコレラ流行の様子  
('荼毘室混雑の図')『安政箇箇流行記』(国立公文書館所蔵)



## 三浦半島と 周辺海域の活断層

三浦半島には、5本の活断層が知られています。活断層とは、岩盤や地層のズレである断層のうち、今後も活動して地震を起こす可能性があるものを言います。ここでは三浦半島の活断層の概略を紹介します。

三浦半島には北から衣笠断層、北武断層、武山断層、南下浦断層、引橋断層の活断層があります。また、1923年関東地震の際に下浦地震断層が出現しました。さらに、浦賀水道の金田湾断層も活断層です。これらの断層をまとめて三浦半島断層群といいます。これらの断層はいずれも上下変位を伴う右横ずれ断層です。

三浦半島断層群の最新活動時期や活動間隔は、1990年代に詳しく調査されました。その結果、衣笠・北武・武山断層をまとめた北断層群は、近い将来の活動の可能性が高いと考えられています。2002年以降30年以内の北断層群の地震発生確率を6～11%と見積もった報告もあります。これに対して南下浦、引橋断層をまとめた南断層群は、北断層群に比べて活動の可能性は低いと考えられています。また、2011年3月11日に発生し



た東北地方太平洋沖地震とそれ以後の地殻変動のデータに基づくと、三浦半島断層群の地震発生確率が高くなっている可能性も指摘されています。

北断層群が活動するとマグニチュード7程度の地震が発生すると考えられ、建物の損壊、液状化、斜面崩壊、津波などの被害が予想されます。このように北断層群は今後の活動が気遣われる要注意断層です。

最近では、海域や地下深部における三浦半島断層群の延長部が明らかになってきました。音波を使って海底の地質構造を探る反射法音波探査により、金田湾沖と葉山沖において、三浦半島断層群の延長部に断層が確認され、相模湾側では少なくとも姥島南方3km付近まで活断層帯が延びていることが明らかになっています。陸上の活断層だけでなく、海域の活断層も同時に活動すれば、地震の規模がより大きくなります。

東日本大震災を引き起こした東北地方太平洋沖地震から、2021年3月11日で丸10年となりました。また、2月13日には福島県沖を震源とし、東北地方太平洋沖地震の余震とされるマグニチュード7.3の地震が発生しました。震災の教訓を忘れずに、地震について正しい知識を持ち、次に来る地震に対して備えを怠らないようにしましょう。

(地球科学担当：柴田)



三浦半島と周辺海域の活断層。赤線は活断層、赤点線は推定活断層を示す。柴田ほか(2021)を簡略化。



## 最近みつめた めずらしい昆虫たち

三浦半島でここ数年の間に確認された、めずらしい(めずらしかった)昆虫たちをいくつか紹介します。

【ウルシゴキブリ】見た目は家屋害虫のクロゴキブリにそっくりなのですが、屋外性のゴキブリです。クロゴキブリよりも体長も翅も短く、全体的に丸みを帯び、黒色が濃い(漆黒)ことで区別できます。三浦半島南



ウルシゴキブリのメス



ケヤキの幹にとまる  
キマダラカメムシ



ヨツモンカメノコハムシとノアサガオにできた食痕

部の、三浦市沿岸部の樹林付近で2018年に見つかりました。本来の分布域は九州の島しょ部以南とされており、本来の生息地から流木によって運ばれたのか、鉢植えなどによって運ばれたのか、詳しいことは分かっていません。その翌年に同所の樹林地内でコロニーを確認したことから、少なくとも三浦半島でも局所的に定着している可能性が高いです。

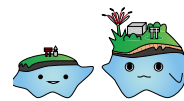
【キマダラカメムシ】やや大型のカメムシで、黒っぽい体に黄色い点や帯がちりばめられています。一見、普通に見られるクサギカメムシにも似ていますが、本種はふた回り近く大きく、足の黄帯が目立ちます。もともと九州以南の分布をしていましたが、2000年代には関東地方に分布を拡大、2010年代には関東地方南部でも発見が相次いでいます。三浦半島では2015年の葉山町に続いて2017年には横須賀市でも発見されました。次項のヨツモンカメノコハムシのように爆発的に分布拡大している様子はなく、2020年夏までに三浦半島では続報がありません。

【ヨツモンカメノコハムシ】平べったい円盤状の黄色い体に4つの黒点が目立ちます。「ハムシ(葉虫)」、つまり葉を食べる甲虫の仲間です。もともと沖縄以南に分布していましたが、2000年以降、九州、四国、東海地方などへ分布を広げました。三浦半島では、2016年秋に横須賀市西部で初めて確認された「めずらしい」昆虫でしたが、その後急速に市内各地で見られるようになり、2020年夏の時点では既に「めずらしかった」昆虫になりつつあります。本種はヒルガオ科の葉を好んで食べます。三浦半島では、菜園のサツマイモや野生化したノアサガオなどヒルガオ科の園芸作物で見られることが多いようです。

(昆虫担当：内船)

## 臨時休園中の動物たち

## 天神島臨海自然教育園



臨時休園（1月12日～3月7日）の間も、天神島臨海自然教育園には様々な野生動物が姿を現しました。1月31日にはタヌキ（ホンダタヌキ）が現れ、しばらく日向ぼっこをした後、森の奥へと戻っていきました。タヌキは天神島周辺に多く生息していますが、昼間に姿を現すのは珍しい光景でした。また、いつもなら遠くから観察するイソヒヨドリなど野鳥も、園内のいろいろな場所でくつろぐ姿を見せてくれました。

（天神島臨海自然教育園 小長谷）



園内に現れたホンダタヌキ



擬木の上にとまったイソヒヨドリ（オス）

## 雪景色

## 天神島臨海自然教育園

1月8日の明け方から降った雪は、天神島一面をうっすらとおおいました。雪の上には鳥の足跡がたくさん残されていました。残念ながら、開園時間の9時頃には解け始め、午前中で雪はなくなってしまいました。天神島で雪が積もることは珍しく、なかなか見ることができない景色でした。

（天神島臨海自然教育園 小長谷）



北口から見た天神島の雪景色



雪の上に残された鳥（サギのなかま）の足跡

## 初春に見られた植物

## 馬堀自然教育園

2月26日に自然部門の学芸員で園内の整備作業を実施しました。林内ではアスカイノデの柔らかな新葉が見られ、学習棟前ではフキが花を咲かせはじめました。フキは、身近なキク科植物の中ではめずらしい雌雄異株（しゆういしゆ）で、画像は雌株になります。

※「初春」とは二十四節気の立春から啓蟄（けいちつ）の前日までの期間（今年は2/4～3/4）です。

（植物学担当 山本）



アスカイノデの新葉



フキの花

### メールマガジン配信中！ メルマガに登録しよう！！

展示やイベント、読み物「学芸員 自然と歴史のたより」などを配信しています。

◎ 登録は簡単！ 博物館 HP で E-mail アドレスを入力！

① 右のQRコードを読み込み、博物館ホームページ内の「メールマガジン登録・変更・解除ページへ」をクリック！

② 「登録・解除フォーム」に E-mail アドレスを入力して「登録」ボタンを押す！

URL ⇒ <https://www.museum.yokosuka.kanagawa.jp/mailmagazine>



Twitter & Instagram

博物館の活動やお知らせについて発信しています！

ycm\_yokosuka 検索